

2019 年度における飛騨高山 AL の活動報告

Hida Takayama AL Activity Report in 2019

共同研究メンバー

○野坂美穂*、金美徳*、高橋恭寛*、水盛涼一*（○代表、執筆者）

Keywords : Regional Development, SDGs, Local Small-and Medium-Sized Enterprises

1. はじめに

多摩大学では、2017 年度より飛騨高山大学連携センターと久々野まちづくり運営委員会との協働の下、飛騨高山アクティブラーニング・プログラム（以下、「飛騨高山 AL プログラム」と略す）を年に 2 回実施している。飛騨高山 AL プログラムは、都市部に居住する本学学生が飛騨高山に赴き、地域の方々とともに地域の課題解決に努め、学生目線での地域活性化に向けた提案を行うことを目的としている。下記は、2019 年度の飛騨高山 AL プログラムの春学期と秋学期の活動事例報告である。

2. 飛騨高山 AL プログラムの概要

2.1 AL プログラムの目的

飛騨高山 AL プログラムの春のテーマは、「飛騨高山の企業における SDGs を考える～持続可能な地域づくりを目指して～」とし、秋のテーマは「SDGs の体感、商品開発、中大接続」をテーマとした。1 年間のプログラムを通じて、SDGs に対する理解を深めることを主目的とした。SDGs は、国連サミットで採択された「2030 アジェンダ」の中核をなす持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）であり、具体的な指標として 17 のゴール・169 のターゲットが設定されている。また、SDGs の基本的なコンセプトは「誰一人取り残さない」ことにあり、持続可能な世界を実現するために発展途上国から先進国まで取り組むべきユニバーサルな目標とされている。

我が国では、SDGs に対する企業の取り組みが一部では見られるものの、地方の中小企業における SDGs の認知度は決して高いとはいえず、その概念はまだ広く浸透していないのが現状である。一方では、企業自体は SDGs を意識していないものの、環境に配慮した企業行動や SDGs のゴールやターゲットに該当する取り組みを既に行っていることも少なくない。以上より、今回の飛騨高山 AL プログラムは、「SDGs」という切り口から、高山市の企業の取り組みを整理することで地域を改めて見つめなおすとともに、新たな学びや気づきを得る機会とし

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

て位置づける。

本 AL プログラムの概要は、表1に示す通りである。今回のプログラムには、多摩大学、帝塚山大学、埼玉学園大学の三大学が参加し、他大学の学生との交流の場にもなった。

表1. 飛騨高山 AL プログラム（春）の概要

	概 要
日程	6月30日～7月2日（2泊3日）
場所	高山市
参加大学	多摩大学（東京都）、帝塚山大学（奈良県）、埼玉学園大学（埼玉県）
参加者数	三大学：計44名（学部生32名、社会人大学院生4名、教職員8名）
内容	1日目：SDGs 講演会・グループワーク 2日目：地元企業へのヒアリング・グループワーク 3日目：ヒアリングの成果報告

（出所）筆者作成

表2. 飛騨高山 AL プログラム（秋）の概要

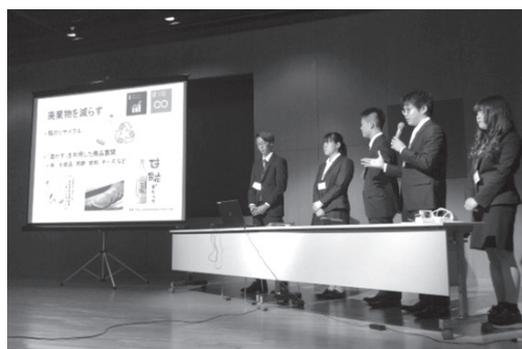
	概 要
日程	10月20日～10月22日（2泊3日）
場所	高山市久々野町
参加大学	多摩大学（東京都）
参加者数	計19名：学部生12名、社会人大学院生3名、教職員4名
内容	1日目：商品開発プレゼンテーション 2日目：地元企業へのSDGsの体感（笠原木材、長瀬土建） 中大接続 3日目：振り返り

（出所）筆者作成

2.2 高山 AL プログラムの活動内容

(1) 春学期の高山 AL

活動内容は、以下の通りである。1日目は、SDGsに関する講演を開催し（多摩大学主催）、市民の方々と学生がSDGsについて共に学ぶ機会とした。2日目は、三大学の学生が6つのグループに分かれ、高山市の中小企業の合計6社に対してヒアリングを実施した。尚、今回ヒアリングにご協力いただいた企業は、(株)駿河屋魚一、(株)オークヴィレッジ、笠原木材(株)、日進木工(株)、(株)長瀬土建、(有)船坂酒造店である。ヒアリングでは、各企業の基本情報や取り組み等についての項目シートにそって質問し、そのヒアリング内容をSDGsの17のゴールに分類し、既に取り組みされていること、取り組まれているが今後強化すべきこと、未着手等に整理することで「見える化」を図った。そして、最終日の3日目は、ヒアリング先の企業の方にもお越しいただき、今回の活動の成果報告会を実施した。その後、質疑応答の時間を設け、企業の方よりコメントを頂戴した。



(2) 秋学期の高山 AL

次に、秋学期の高山 AL についてであるが、久々野まちづくり運営委員会より「久々野のまち」について、動画とともにご紹介いただいた。続いて、昨年度から実施している「久々野の魅力情報発信事業」についてもご説明いただいた後、「久々野の魅力」の効果的な SNS の発信方法について、チームに分かれてディスカッションを実施した。また、昨年度に引き続き、学生は「りんご味噌」を用いたメニュー提案、久々野の名産である「りんご」を使用した新たな商品提案を行った。日中の活動終了後は、久々野町の住民の方々の方に「ホームステイ」をさせていただき、人的交流を深めた。



3. 学生の振り返り（一部抜粋）

ALプログラム終了後には、学生は活動を行ったうえでの気づきや学びを報告書に記載し、提出する。下記は、報告書の一部の内容を抜粋したものである。

- ・ ホームステイ先では、各集落に存在する神社で行われる祭りが過疎化や合理化によって減ったことについて話を聞くことができた。その他に住民同士の関係が緊密であること、伝統的な「地縁や血縁の濃さ」も他の地域とは異なる久々野の魅力であると感じた。QOLや生きがい重視される今日において、人のつながりや自然の力は、生活の利便性に勝る何にも代えがたい価値を有している。また、「関係人口」という点からみても、久々野の人々が持つ魅力は大きな資源の一つであると感じた。
- ・ 観光客や移住者を増やすうえでも地域活性化を行ううえでも、中心にあるのは久々野の伝統やアイデンティティであり、それをなくしては意味がないと強く思った。
- ・ 久々野中学校の生徒との交流では、現地の食材を使った給食を食べたことは良い経験となった。久々野町は「地産地消」の給食であることは、地域活性化や地域貢献の一翼を担う良い取り組みであると考えられる。
- ・ 今回はホームステイであったため、ホームステイ先の方々と交流し、久々野町や方言について、そして都会との違いなど様々な話をしながら人々の温かさを感じた。中身の濃いプログラムであった。

4. まとめ

春のプログラムを通じての学生の気づきは、以下の点である。第一に、中小企業では、SDGsの17の全ての目標に取り組む必要性はなく、既に行っている取り組みを改めて見直したうえで、どのように発展・深化させていくかが課題であること、第二に、一つ一つの企業の取り組みも重要であるが、企業を取り巻く地域の多様なステークホルダーが関わりあい、互いに連携を強化することで、持続可能な地域づくりが可能となることである。

一方、秋のプログラムでは、SDGsを実際に体感することで、企業での取り組みをより深く理解し、また自分達の日々の生活のなかでもSDGsを意識することが重要であることを改めて感じる機会となった。また、地元中学生との交流や民泊など「人的交流」を通じて、学生は地域の人々の温かさを知る機会となったことが窺える。学生の振り返りでは、久々野町の一人一人が、地域に愛着を持つとともに誇りに思っていることを改めて感じたという意見が多く見られた。久々野町の最も大きな魅力はそこに住む「人」であり、それら人々のつながり、そして自然や文化などを含めた久々野町の魅力をどのように伝えていけばよいのか、学生一人一人が自分たちなりにできることを考える機会にもなったのではないかと思われる。